

社会人育成を俯瞰する短大型入学前教育の構築

Developing Fundamental Competencies for Working Persons in Education Program Starting before College Entrance

小棹理子* 伊藤善隆** 岩崎敏之*** 高橋可奈子****

*湘北短期大学情報メディア学科 **湘北短期大学総合ビジネス学科

湘北短期大学生生活プロデュース学科 *湘北短期大学図書館

Abstract: Due to the rapid changes in the environment surrounding businesses and education, the development of young working people having basic abilities commonly required in all types of jobs are keenly demanded. To meet such demands, Shohoku College developed a novel first year experience (FYE) program starting from February before college entrance. The program allows the students to be carrier-minded from the early stage of college education and to set their goals they should achieve in two years; i.e., acquiring the fundamental competencies for working persons, such as the ability to find problems for creating new values, the ability to effectively work toward solutions of problems, and the ability of working in a team. In the program, these abilities are comprehensively defined as interpersonal communication skills, which includes non-verbal communication, fundamentals of Japanese speaking and writing, utilizing library and internet as learning commons, fundamental PC skills, working in a group to find and solve problems(virtual project based learning), and presenting the solution in teams. Assessments and enquiries were made to check the effect of the program. Finally, e-learning was partially incorporated to establish an effective FYE program.

Keywords: First year experience, project based learning, e-learning, coordination program with upper secondary school

1. はじめに

社会・企業で即戦力となる人材の育成に向けて大学では、就業力の向上に向けた教育の充実に取り組んでいる。特に短期大学(以下、短大)では2年間という制約下でジェネリックスキル(社会人基礎力/社会人力)の育成と専門性の向上の両立が重要な課題となっている。

このような状況のもとで湘北短期大学(以下、湘北短大)の教育目的である「社会で本当に役立つ人材の育成」を2年間で達成するために、早期から勉学の動機付けを行う入学事前授業を行ってきた^[1,2]。より詳細には、2008年度に高大連携校からの入学予定者に対

し試験的に接続講座(30名受講)を開講し、その結果を踏まえて翌年から入学後に単位認定を行う正式な科目「コミュニケーションリテラシー」を設けた。

この授業は、高校での学習内容の復習を主とするいわゆる一般的なリメディアル教育や、専門教育の導入準備となる4年制大学の初年次教育^[1]とは異なり、職業をもつ一般社会人が備えるべき基礎能力を身につけることの重要性を早期から学生に理解させることを主目的としている。さらに、単なる職業教育ではなく、実社会で必要とされる生涯有効な基礎能力を短大での2年間で得ることができる、という予感を生徒に持たせることによって勉学への動機づけを行うことを意図したものとされており、湘北短大独自の初年次教育と位置付けることができる。

Riko Ozao
Shohoku College
E-mail:ozao@shohoku.ac.jp

このような趣旨で湘北短大型入学前教育科目を確立するにあたり、情報リテラシーの発展系として内容を構築するとともに規模効果が問われるため、本学の教育には不適であると言われてきたeラーニングを部分的に導入した。学生からも評価の高い、効果的な授業を展開することが可能になったので報告する。

2. 教育改善の内容と方法

湘北短大には4学科(情報メディア, 総合ビジネス, 生活プロデュース, 保育)があり、各学科1名以上の教員と職員で構成される学科横断のセンター組織が設けられている。センター組織の一つであるリベラルアーツ(LA)センターは、全学共通のリベラルアーツ、いわゆる一般教養科目のカリキュラム編成や企画運営を行う。

入学事前授業を行うリベラルアーツ科目「コミュニケーションリテラシー」を構築す

るにあたり、図1に示したPDCAサイクルに従って年度ごとに計画を実行し、その効果を評価して改良を加え、湘北短大型の入学事前科目「コミュニケーションリテラシー」(表1)を完成させた。すなわち、年度前の3月に開催される高大産連絡協議会で計画を提案し(P)、授業を行い(D)、後述(3.(1))するアセスメントやアンケート調査を実施し(C)、その結果に基づき授業内容に取り入れるべき内容やツールの調査・研究を行い(A)、次年度計画に盛り込んだ。

「コミュニケーションリテラシー」では、現代の社会人に必要な基礎能力の育成という観点から、コミュニケーション能力を「【読む・書く・話す・パソコン】力を基本として他者と情報を交換したり、提案をしたり、問題を解決したり、プレゼンテーションをしたりする能力」と定義している。「話す・書く力」、「コミュニケーションツールとしての

電子メールやパソコンソフトウェアの利用」、「確かな情報源としての図書館の正しい利用法」、「(グループで取り組む)問題解決」、等を導入し、5~6名のグループワークで問題解決・企画提案を行う形式が基本となっている。

2010年度は高大連携校からの入学予定者(176名)を、2011年度以降は全入学生を対象として段階的に人数を拡大して実施体制を確立する一方で、短期効果(1~2か月)と長期効果(1年後)の確認のために「社会人キャリア力育成アセスメン



図1 短大型入学前教育科目の構築プロセス

ト」を導入し、受講前（2～3月）と受講後（4月）にアセスメントを実施した。

表1 授業内容

1 講	ガイダンス (社会人キャリア力育成アセスメント実施)
2 講	ノンバーバルコミュニケーション
3 講	ノンバーバルコミュニケーション (演習)
4 講	コミュニケーションの基本—話す技術
5 講	コミュニケーションの基本—書く技術
6 講	情報検索—図書館の利用法
7 講	問題と問題解決の技法
8 講	情報の分析と MS-Excel の活用：表計算
9 講	情報の整理と MS-Excel の活用：グラフ
10 講	問題解決：発散技法 (プレゼンテーション準備)
11 講	問題解決：収束技法 (図 1, 右上)
12 講	グループプレゼンテーション
13 講	社会人に必要とされる日本語力, 時事問題の知識, 計算能力 (社会人キャリア基礎力) 【eラーニング】
14 講	社会人に必要とされる日本語力, 時事問題の知識, 計算能力 (社会人キャリア基礎力) 【eラーニング】
15 講	まとめ (アセスメントと結果のフィードバック)

2011年度は、前年の結果を踏まえ、より効果的な授業とするために、2月受講生197名に対し試験的にeラーニングを実施した。なお、同年度は446名（全入学者の80%）に対し2～3月に4クラスで開講する予定であったが、東日本大震災の影響で3月14日から開始を予定していた後半2クラスが開講不能となったため、前年度と同様に高大連携校からの入学予定者が主対象となった。

2012年度は、全入学予定者457名の88%にあたる403名の申し込みがあった。同年度からは、高大連携校以外からの受講者が約半数を占めるため、本学の教育内容の理解度や勉学意欲に前年度と大きな差が生じるものと思われる。また、前年度受講生へのアンケート回答結果（3.（3）詳述）を踏まえて、独自にコンテンツを作成し、学内でMoodleを利用したeラーニングシステムを構築した。

この3年間でアセスメント結果や、就職先

企業・インターンシップ先へのアンケート回答結果^[2]、高校教員からの要望も取り入れて完成させた「コミュニケーションリテラシー」では、受講生は、高校3年次における大学入学前の2～3月の4日間に90分/1コマの授業を12コマ、入学後の4月までに3種類のeラーニング2コマ、4月に1コマ、計15コマを受講する。eラーニングは、「ことば」、「生活」、「数字」、の3分野（各30問）から成っているが、それぞれの分野の所要時間が最低1時間であるため、3分野で2コマとした。所定の要件を満たせば、受講生には入学後にリベラルアーツ科目群の「コミュニケーションリテラシー」の2単位が認定される。

3. 教育実践による改善効果と確認

(1) 社会人キャリア力育成アセスメント

本アセスメント（日本インターンシップ推進協会（JIPC）主管）は、経済産業省が提唱する社会人基礎力（「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」を細分した12の能力要素）^[3]と社会人常識力（日本語力、社会マナー、時事問題、計算力）で構成され、自己評価と客観評価から成る。本アセスメントをプレ・ポストテストとして用いた。

短期変化（1～2か月）

一例として、表2に2010年度入学生を受講前（2月）と受講後（4月）の推移を示す。図2は、2010～12年度を受講生のプレ・ポストテストによる自己評価と客観評価の推移（増し分）を表したものである。

平均値の推移が有意かどうかは、等分散が仮定できるかどうかのF検定を行い、有意差の有無に応じて等分散を仮定するt検定か、または等分散を仮定しないt検定を行った。表中、F検定で等分散と認められなかった項目については斜字で示した。有意水準 $p < .05$ で差が認められた項目の数値を太字で示した。表2、図2（上）から、2010年度受講生は、状況把握力と規律性を

表2 2010年度受講生のアセスメント結果

	入学前2月 (N=180)		入学後4月 (N=169)		推移 (2月→4月の増分)							
	2月8日、9日		4月17日、24日		自己評価		客観評価					
	自己評価	客観評価	自己評価	客観評価	F検定	t検定	自己評価	F検定	t検定	客観評価		
社会人基礎力	主体性	64.44	77.73	72.54	78.82	0.56	0.00	8.10	0.21	0.17	1.08	
	働きかけ力	65.44	80.62	69.94	83.91	0.47	0.01	4.50	0.48	0.00	3.28	
	実行力	68.22	82.93	71.36	83.36	0.39	0.04	3.14	0.29	0.61	0.43	
	課題発見力	64.56	86.02	68.99	88.36	0.36	0.01	4.44	0.10	0.01	2.33	
	計画力	60.44	89.42	65.44	92.59	0.83	0.00	5.00	0.00	0.00	3.17	
	創造力	61.56	84.04	66.27	84.47	0.98	0.01	4.72	0.46	0.63	0.43	
	発信力	61.11	86.20	66.15	88.66	0.31	0.00	5.04	1.00	0.01	2.46	
	傾聴力	79.22	79.13	84.97	81.51	0.29	0.00	5.75	0.50	0.01	2.38	
	柔軟性	76.44	86.78	80.83	87.64	0.41	0.00	4.38	0.82	0.36	0.87	
	状況把握力	75.67	89.07	78.11	91.12	0.83	0.10	2.44	0.01	0.02	2.06	
	規律性	86.22	89.98	87.46	91.43	0.91	0.35	1.23	0.00	0.15	1.45	
	ストイコホル力	68.22	80.22	73.96	80.73	0.39	0.00	5.74	0.92	0.62	0.51	
	社会人常識力	日本語力	62.00	54.83	64.97	56.04	0.81	0.07	2.97	0.47	0.49	1.20
		社会マナー	73.33	52.00	77.16	68.93	0.00	0.01	3.83	0.38	0.00	16.93
時事問題		58.33	28.17	62.84	30.41	0.63	0.00	4.51	0.02	0.14	2.25	
計算力		65.78	49.28	68.88	40.00	0.39	0.07	3.10	0.82	0.00	-9.28	

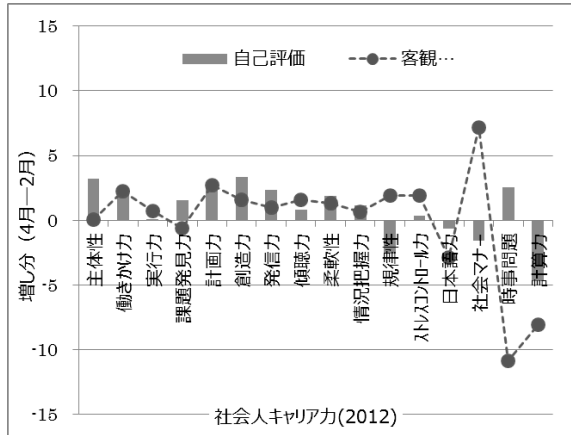
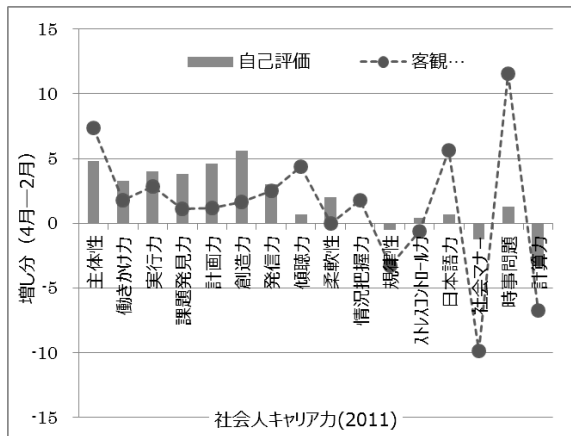
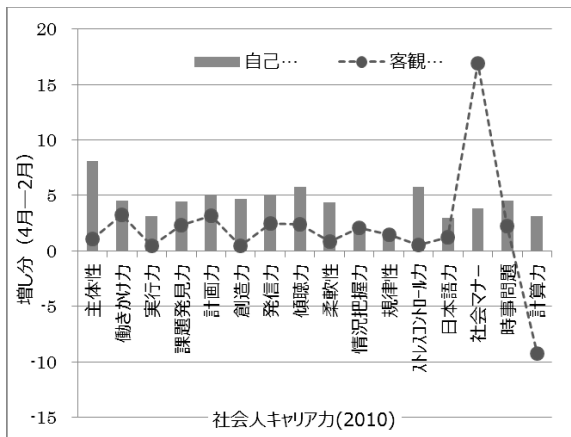


図2 2010～12年度入学生のプレ・ポストアセスメント結果の推移（自己評価と客観評価）

除く社会人基礎力において大きく成長したと自己評価していることがわかる。規律性に伸びが見られない理由として、受講前の段階で既に他の基礎力と比較して点が高いことが挙げられよう。つまり、受講生はこの授業を受ける前にすでに高い規律性を持っていると自己評価しているということであり、これは高校の教員からの評価とも一致した。

一方、客観評価から伸長したと読み取れるのは、働きかけ力や計画力であり、かならずしも自己評価と一致するわけではない。知識の獲得は短期で実現可能であるが、行動や態度を伴う能力を確実に身につけるには、最低でも2～3か月の期間が必要であると言われている。自己評価の高さは、受講生がその能力要素に対して意識したことの顕れであるとみるべきであろう。4月の段階での客観評価結果を受講生にフィードバックすることで、個々が入学後の2年間で身につけるべき目標を明確化することができる。

図2（中）と同（下）は、それぞれ2011年度と2012年度の入学生の各要素に対する自己評価と客観評価の推移である。細部では年度ごとの差異はあるが、共通しているのは、社会人基礎力に対する自己評価が上昇している点である。本授業目的を達成するために学生自身が意識して努力した結果であることが伺える。一方、客観評価で共通して有意に上昇したのは、「前に踏み出す力（働きかけ力）」と「チームで働く力（発信力、傾聴力、状況把握力）」であり、グループワークによって、実践知として身についた力と考えられる。

社会人常識力では、2010～11年で上昇していた日本語力と時事問題の評価が2012年に逆転した。これは受講生の質的変化の影響も考えられる。

さらに、2か月間で「計算力」が著しく低下することも示唆され、eラーニング等

を用いた反復学習機会の導入の強い動機となった。

長期変化（1年）

2010年度入学生に対して1年後に再度アセスメントを行って客観評価の推移を確認した。どの社会人基礎力要素においても2月から4月への増し分よりさらに伸びていた。この傾向は、2011年においても同様であった。

表3は、受講生(n127)と非受講生(n267)の違いを示したものである。どの基礎力要素においても受講生の評価が非受講生のそれより高くなっている。高大連携校からの入学者と一般入学者の違いも考慮しなければならないが、初年次教育が2年次以降の勉学意欲の向上につながることは種々報告されており^[1]、本学の場合もその一例とみることができよう。

表3 受講生と非受講生の基礎力向上の比較（1年）

社会人基礎力	受講生のみ		非受講生		比較	
	入学1年後2月 (n=127)		入学1年後2月 (n=267)		(受講生-非受講生)	
	自己評価	客観評価	自己評価	客観評価	自己評価	客観評価
主体性	75.91	79.46	71.09	78.20	4.82	1.26
働きかけ力	69.61	84.69	67.94	82.26	1.67	2.43
実行力	72.44	84.41	69.44	83.03	3.00	1.38
課題発見力	70.08	89.48	68.69	87.84	1.39	1.65
計画力	67.87	93.83	64.49	92.10	3.38	1.72
創造力	65.83	86.46	64.49	85.57	1.33	0.88
発信力	68.98	88.82	62.47	87.64	6.50	1.18
傾聴力	82.36	82.43	81.95	81.38	0.41	1.05
柔軟性	81.57	90.05	80.82	89.48	0.75	0.56
状況把握力	80.00	91.62	78.05	90.46	1.95	1.17
規律性	87.40	92.31	85.77	90.92	1.63	1.39
ストレスコントロール	74.17	82.55	70.11	80.37	4.06	2.18

(2) 受講生アンケート

受講生に対して受講直後(4月)と1年後にアンケート調査を行った。受講直後のアンケートでは大学での学びの理解度を確認する他に、「この授業を後輩や友人に勧めるかどうか」を問う、いわゆる満足度調査を行っている。図3に示すように、毎年92%超が他人に勧める、と答えており、受講者から一定の評価が得られていることがわかる。

図4は1年後の振り返り調査である。本学では、「コミュニケーションリテラシー」以

後輩や友人に受講を勧めるか？

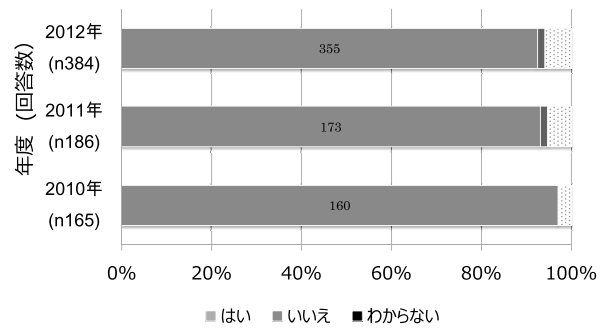


図3 受講直後の満足度調査結果

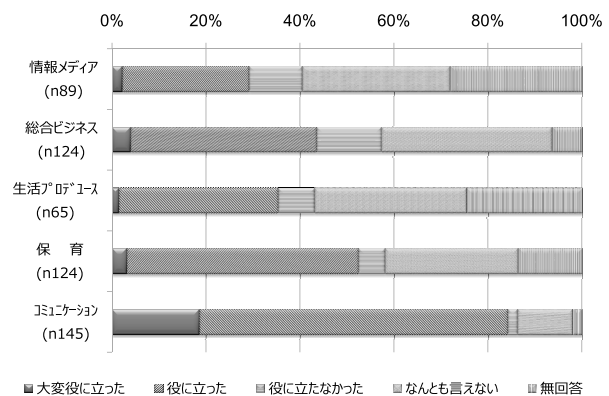


図4 1年経過後の入学事前授業や学科の課題に対するアンケート結果

外に、学科独自に行っている「入学前課題」があるため、受講後1年が経過した時点で受講生にどのように認識されているのかを問うたもので、2011年度入学生の例である。有用性(4点評価)を比較すると、各学科の課題に対しては4学科平均で42%が有用であると答えているのに対し、「コミュニケーションリテラシー」(図中は「コミュニケーション」と略記)に対しては例年受講生の90%前後が「大変役に立った/役に立った」と答えている。

(3) eラーニングに関するアンケート調査

2011年度受講生に対し、eラーニングを試験的に導入した。本学規模の短大で教育効果があるのかどうか、学生が自主的に取り組むのかどうかを見極めるためである。ASPを利用して就職試験として実施される一般常識問題に類似の3分野(言葉42問,暮らし44問,数学42問)からなるWeb課題を課した。3月

15日～4月20日の間で197名のうち85.3%が受講し、平均アクセス数は10.83回であった。入学後6月に受講生に対し、社会人に必要な常識力を高めることを目的として実施したことを述べた上で、興味や難易度に関する設問を含むアンケートを行った（有効回答率97%）。「有用性」に対する回答結果を図5に示す。

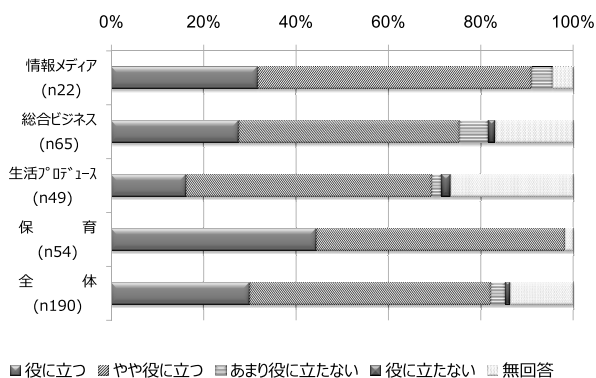


図5 eラーニングの有効性に対するアンケート結果

82%の学生が「役に立つ」と答えており、課題に積極的に取り組んだことが伺えた。コンテンツにより学生の取り組み方が変わってくることを示唆された。他の項目への回答結果から、難易度や量的な課題があることもわかった。以上の結果を鑑み、前述したとおりMoodle上に「ことば」、「生活」、「数字」、の3分野（各30問）の問題と解答解説を備えた独自のeラーニングシステムを構築し、2012年度入学生から本格導入することとなった。

4. おわりに

本学の教育理念である「社会で本当に役立つ人材の育成」を2年間で達成するために、eラーニングを導入した短大型の入学前教育科目を確立した。単なるリメディアル目的ではなく、職業人にとって生涯有効な基礎能力を向上するための入学前教育は学生からの評価も高い。特にeラーニングは、短大入学後も利用でき、遠隔地からの入学者に対しても有用である。今後その教育効果が期待される。

アセスメントの実施は、結果を個人にフィー

ドバックする一方、各学科のゼミ担当教員等にも配布したため、学修指導やキャリア教育に活用され、有効であった。今後後継科目やカリキュラム開発の一助となる。

謝辞

eラーニング導入に際してご尽力いただいたICTセンター長の内海太祐准教授、岡原武氏（同センター係長）に御礼申し上げます。

参考文献および関連URL

- [1] 濱名篤, 川嶋太津夫編著: 初年次教育 - 歴史・理論・実践と世界の動向 - . 丸善(株), 2006.
- [2] 小棹理子, 石井卓也, 岩崎敏之, 飯塚順一: 入学前教育から開始するキャリア教育の評価の試み. 日本教育工学会研究報告集, JSET11-5, pp.79-82, 2011.
- [3] <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm> (2012.9.1.参照)
- [4] 小棹理子, 伊藤善隆, 岩崎敏之, 藤澤みどり, 高橋可奈子, 住谷勉, 原満: 情報教育からキャリア教育へ - 高大連携による接続教育プログラム. 平成20年度教育改革IT戦略大会論文集 (社) 私立大学情報教育協会, pp.94-95, 2008.
- [5] 小棹理子, 伊藤善隆, 岩崎敏之, 高橋可奈子, 藤澤みどり, 佐藤明宏, 原満, 関祐太郎: 短大型入学前教育「コミュニケーションリテラシー」の構築. 日本教育工学会研究報告集, JSET10-2, pp.77-80, 2010.

本研究は平成21年度文部科学省選定大学教育・学生支援推進事業【テーマA】「現代型社会人育成を俯瞰する入学前教育構築」の一環として学長主導の下、全学的に行われた。